

社会福祉理論における福祉国家観の一端に関する考察

—孝橋理論と岡村理論の検討から—

北星学園大学 伊藤 新一郎 (005419)

キーワード：孝橋理論・岡村理論・福祉国家

1. 研究目的

日本と世界がともに戦後復興から高度経済成長への歩みを始め、本格的に「福祉国家化」を目指す時代に日本社会福祉学会は設立された。同時期には孝橋正一と岡村重夫の記念碑的著作が上梓され、戦後日本において社会福祉研究が「学」への歩みをスタートさせた頃でもある。このように、社会福祉学と福祉国家はともに時代背景を共有する親和性の高い関係にあるはずである。また、福祉国家を社会福祉実践にとってマクロレベルの「環境」と位置づけるならば、「課題解決を志向する実践の学」とされる社会福祉学においても福祉国家は注目すべき存在といえる。

それにもかかわらず、戦後日本の社会福祉学の理論研究では、社会福祉の「本質」を追究する伝統が形成された一方、福祉国家は研究対象として取り上げられることは少なかった。それはなぜなのか。「理論研究の停滞」が指摘されて久しいが、それもこの問いと決して無関係ではなく、おそらくは社会福祉学の学問的性質や志向性に由来するものである。それを方向づけるのが社会福祉理論であるならば、これまでの社会福祉学と福祉国家の関係を再考する際には理論的見地からの検討が必要と思われる。そして、それは長らく停滞期の中にあるとされている理論研究の今後を展望する一助になる可能性をも秘めている。

以上を踏まえ、本研究の目的は、戦後日本の社会福祉理論が福祉国家をどう捉えていたか、その一端を考察することである。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点および方法として、孝橋正一と岡村重夫の社会福祉理論（以下、それぞれ岡村理論、孝橋理論とする）を取り上げる。その理由は、社会福祉本質論争以降、孝橋理論と岡村理論は戦後日本の社会福祉学の黎明期にその学問的基礎を形成・提供した二大理論といえることに加え、黎明期のみならずその後の社会福祉理論研究や社会福祉学へ大きな影響を与えたといえるからである。よって、本研究の目的を踏まえれば、孝橋理論と岡村理論を手がかりとして検討することが有効と考える。なお、検討対象とする研究業績は、福祉国家への直接的あるいは明示的な言及が確認できるものに限定する。

3. 倫理的配慮

本研究は一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理規程・研究ガイドラインを遵守する。

4. 研究結果

孝橋理論と岡村理論における主要な先行業績をレビューした結果、2つの理論の特徴を踏まえた福祉国家の捉え方の要点は以下の通りである。まず孝橋理論は社会科学的方法論（マルクス主義）を基礎とした「政策論（補充論）」である。その理論的特徴は①「社会福祉」ではなく「社会事業」という表現を用いること、②社会事業の対象は「社会的問題（関係的・派生的問題）」であり「社会問題（基礎的・本質的問題）」へ対応する社会政策の限界を補充する存在と位置づけたこと、③社会事業の目的を「資本主義体制の維持」としていること、④社会事業の対象を「国民大衆＝労働者」とみなしたことの4点である。

孝橋理論では福祉国家を「国家独占資本主義（段階の国家）」として批判的に捉えている。そこでは「資本の論理」が貫徹されることで、労働者階級の窮乏化が進行し、福祉国家は、所詮「政治的プロパガンダ」にすぎないとされる。また、福祉国家は社会事業の拡大・発展を通じて資本の要請に応え、その保持・安定を確保しようとする存在でしかない。

次に岡村理論は「社会福祉の固有性（限定性）」を確立することを志向する「固有論」である。その理論的特徴は①社会福祉に関する3つの定義例を踏まえ、(近代的)社会福祉の論理を発展的図式で提示したこと、②社会福祉の対象限定の視点として社会関係の主体的側面へ注目したこと、③社会福祉の対象を「社会生活上の困難」とし、社会制度との関連から社会生活の基本的要求を明らかにしたこと、④社会福祉の固有性を4つの視点あるいは原理（社会性・現実性・主体性・全体性）で提示したことの4点である。

岡村理論において、福祉国家は「社会福祉の対象者を全国民と規定する立場を最も典型的な形で表明したもの」として「社会福祉の拡大（化）」と捉えられている。そこでは、社会福祉は国民の社会生活上のあらゆる困難を守備範囲とするため、固有の姿を見出せなくなり、集合名詞にすぎないものとなる。

5. 考察

研究結果を踏まえた考察の要点は以下の通りである。第1に「現実・現象」としての福祉国家の象徴的形容について、孝橋理論は「国家独占資本主義（段階の国家）」、岡村理論では「社会福祉の拡大（化）」であった。第2に福祉国家の具体的な捉え方について、孝橋理論において福祉国家は歴史的・社会的存在である社会事業を規定する社会体制であり、現在における資本主義の発展段階を表すものとして根本的批判の対象である。岡村理論では、福祉国家は「社会福祉の拡大」として3段階の重層的な「(近代的)社会福祉の論理構造の図式」における構成要素である。そのため重要な位置づけではあるが、「社会福祉の固有性」を志向する立場からすればそれには限界がある。孝橋理論・岡村理論における福祉国家の把握・分析内容と理由については、それぞれの立場（政策論・補充論／固有論）を反映し大きな差異がみられた。一方で、福祉国家への批判的視点を持ちつつも、それを規範的に論じる視点の希薄さという共通性も見出され、国家論的視点の脆弱性を指摘できる。